

広州周辺の「遊龍探親」慣行と地域社会 —— 獵徳村の事例を通して ——

彭 偉文*

龍舟を漕いで端午節を祝うのは、世界的に知られる中国の伝統的な行事である。文人や学者に注目されて以来、数多くの記述が残されている。しかし、これらの記述のほとんどは、「競渡」という競争的な龍舟行事であり、その他の非競争的な活動は無視されているといつてよい。広東省の珠江デルタ、特に広州周辺の農村の地域社会で、端午節の期間に、非競争的な龍舟行事である「遊龍探親」という慣行が行われている。「遊龍探親」は地方の言い方で、「遊龍」と略している場合も多い。「遊龍」とは、龍舟に乗って巡航することを意味する。「探親」とは、親族訪問という意味である。要するに、「遊龍探親」は「親族」と認めている村同士が、龍舟に乗って互いに訪れる行事である。地域社会の人々に、その重要性は「競渡」と同一視されており、地域社会で大変重要な役割を果たしている。

ここで、広州市の近郊にある獵徳村の「遊龍探親」を通して、この慣行について検討しよう。

一. 背景

獵徳村は広州の東郊にある典型的な珠江デルタの村落である。1993年、都市成長のため、村の農業用地は広州市政府にすべて買収された。それ以前、村民の主な生業は果実や野菜の生産であり、川獵で生活を立てる村民もいたといわれる。稲の生産は行われていたが、その目的は自給であり、量はあまり多くなかったようである。村所属の小企業も少々あったが、土地の買収や広州の都市発展企画と合わないなどの原因で、終わらされてしまった。現在、村内では工業、農業がほとんど行われていない状態である。

※神奈川大学歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

村民の多くは出稼ぎや、「流動人口」といわれる他所のところから広州に来た人に家を貸すなどで暮らしている。獵徳村には6000人あまりの人口があり、李という苗字を持っているのが圧倒的に多い。「流動人口」はこれの倍ほどであるが、中国の戸籍制度によって、獵徳村民としては認められていない。「流動人口」は「遊龍」に参加することができない。理由は中国の河川の少ない内地からの人には、龍舟行事に慣れていない、または泳げないのが多いというものであるが、閉鎖的な性格をもっている中国農村社会の「外人」に対する微妙な拒否が窺えると思う。

珠江デルタの村々は、ほとんど川に沿ってまたは小さい川を挟んで設けられている。獵徳村も例外ではない。その南側を流れている珠江につながる獵徳涌という一本の小さい川が村を貫き、東と西の二つの区域に分けている。地理的には、獵徳涌の東の方を東村、西のほうを西村というが、村の社会学的構成において、伝統によって、西村は「一片」、東村は「二片」と「三片」に分けられている。この三つの「片」は、いつどのような根拠で分けられたか、もう明らかにできなくなってしまった。それぞれの「片」には異なる「阿公」とよばれる神が祭られる。「遊龍」が行われる際に、神様に保護してもらうため、龍舟に「阿公」の小輿が必ず載せられ、これは「公座」と呼ばれる。

村は水郷にあるため、端午節の「遊龍」は獵徳村での最も重要な集団性年中行事である。文化大革命の期間を除いて、毎年盛大に祝われている。文化大革命が終わると、「遊龍」がすぐに復活した。そのとき、村の持っている龍舟は三隻

しかなかった。それぞれ前述の三つの「片」に所属している。1990年代に至り、龍舟の数が八隻まで増えた。そのなかで、「金龍」(黄色で龍の鱗の図案が描かれている)二隻、村全体に所属し、「紅龍」(紅色)二隻が、「一片」に所属する;「花龍」(紅色で紋様が描かれている)二隻が、「二片」に所属する。さらに「五色龍」(五つの色が塗られて紋様が描かれている)二隻が、「三片」に所属する。花龍と五色龍に描かれている紋様は同じであり、「八仙」という八人の仙人の持ち物と花や果物などである。毎年、端午節の龍舟行事が終わると、龍舟は川底の泥に一年間寝かされ、来年の活躍を待っている。

慣例によって、村ごとに「遊龍」の期日は固定されており、そのすべては旧暦の五月一日から五日までの間に入っている¹。「遊龍探親」の伝統を持っている村の数が膨大であるゆえに、期日の同じである村はかなり多い。大体、地理的に近い村の「遊龍」は同じ期日に行われ、遠く離れている村から訪れてくる龍舟の便宜を図るのである。それゆえ、自分の村で「遊龍」を行う日に、村全体所属の龍舟を派遣してほかの村へ「探親」しに行くのは普通である。

獺徳村の「遊龍日」は五月五日の端午の日であり、毎年、獺徳の招きに応じて訪れてくる龍舟の数は百あまりある。たまに少ない年もあるが、それでも80以上ある。

「遊龍探親」で使う龍舟の多くは「長龍」といわれる長い型の龍舟である。短距離の競争に最適の流線型の形を持っている「長龍」は、幅か1メートルあまりであるに対し、長さはおよそ「一丈」、即ち30余メートルであり、七十人から百人以上の漕ぎ手が乗れる。村内部を通る川のほとんどはかなり狭いもので、このような長さを持っている龍舟にとって、Uターンするのは無理である。これがゆえに、龍舟は完全に前後対称で作られている。「遊龍」または「競渡」のときに、龍舟の両端に龍頭と龍尾をつけ、龍舟の前後を形式的に表しているが、どちらに龍頭をつけるかには決まりがなく、必ず龍頭を進行方

向に向けるとも限らない。「回龍」(龍舟の進行方向を逆転すること)のときに、龍舟が動かず、漕ぎ手の向きを逆転して方向を逆にする。ここで言っておきたいのは、龍舟の漕ぎ手は皆普通の農民だということである。よく訓練された百人前後の龍舟の漕ぎ手が不思議なスピードで一斉に体を180度回すことを見、集団性を欠いているといわれる中国農村社会の実際と対照すると、驚くものである。

龍舟に乗っている人には、漕ぎ手を除き、次の人々がいる。

1. 旗手二人。龍舟の両端に立ち、手持ちの小さい旗で舵取りに指示を出して龍舟の前進方向を把握する重要な存在である。旗手は龍頭と龍尾を傷つけない責任を負っている。万が一の際に、龍頭や龍尾が何かにぶつけられて損壊する可能性があるかと判断すると、瞬時についでいる紐で龍頭または龍尾を吊り上げなければならないのである。大変な経験と反応力が必要である。
2. 舵取り二人から四人。方言では「抓梢」という。龍舟の両端、旗手の後ろに立ち、旗手の指示を受けて龍舟の方向をコントロールする役目で、力持ちでなくてはならない。
3. 太鼓叩き二人。龍舟の真ん中に置かれた太鼓を叩くもの。漕ぎ手は太鼓の音の強弱と遅速にあわせてリズムと力の強弱を調節し、龍舟のスピードをコントロールする。同時に、太鼓の音で観客の目を惹き、村の誇りを表すなどの役割も果たしている、大変光栄な存在である。
4. 鑼を叩く人四人から八人。龍舟のあちこちに立ち、太鼓の音に合わせて鑼を鳴らし、非常ににぎやかな環境の中でも太鼓叩きから出された指示を一人一人の漕ぎ手に伝達し、龍舟全体を一体化させる重要な役割を果たしている。「探親」しに行く途中で仲のいい村の龍舟に会うと、速く軽い叩き音で好意を表すのもこの人たちの役目である。
5. 「公座」を持つ古老一人。「遊龍探親」中、ほ

かの村々と交渉する重要な人であり、必ず人望が厚く、儀礼に詳しい人ではなければならぬ。

二. 遊龍探親

生業が大きく変わってきたにもかかわらず、獺徳村の遊龍は概ね昔ながらの形で行われているといわれる。

「遊龍探親」は五月一日から五日の間に行われる。その準備は四月の初めから始まり、全部でおよそ一ヶ月かかる。1949年以前、行事の主催者は決まっていなかった。村民のなかで自らの財力または人望に自信をもっている人であれば、誰でも資金を出し、「船頭」と呼ばれる主催者になれる。1949年の中華人民共和国の成立により、資金などはすべて村の行政組織である「村民委員会」が管理するようになったという。

端午節の龍舟行事は、龍舟の用意からはじまる。獺徳涌の底に埋められている龍舟を掘り出すことを、「龍出水」または「出水龍」という。伝統を代々伝えるために、必ずまだ龍舟に乗れない村の少年たちがこの仕事を務める。伝統に従えば、その期日は四月八日（仏佗の誕生日で「仏誕」といわれる日）であるが、今は出稼ぎへ行く人や学生の都合に合わせて、四月八日に最も近い日曜日に行われるようになっている。

龍舟を掘り出してきれいに洗った後、水面に浮かばせて天日で干し、それぞれ決められた色や紋様を付け直す。その中で、村を代表して「競渡」に出る龍舟は完全に乾かして重さを最低限にすることが必要とされる。この場合、「龍船床」と呼ばれる丸太でできた棚に置き、十分に乾かすことがなされる。

龍舟の用意ができると、訓練が始まる。泳げれば龍舟に乗る資格を認められるが、実際には、漕ぎ手のほとんどは青壮年である。ほかには旗手や太鼓叩き、舵取り、「公座」を持つ人などは、技術や経験、人望が必要であるため、村民に公認された人が担当する。中でも、太鼓叩きはとりわけ光栄な存在と認められており、これを入

札で決めるところは少なくない。獺徳ではこのような入札は行われぬが、太鼓叩きをよく担当する者が一人でも家族がいると、全員が誇りを感じるという。

同時に、「探親」しに来る村々を招くことも進んでいる。各村に代表を派遣し、村ごとに来る予定の龍舟の数を確認すると、龍舟に一隻ずつ招待状と礼金を渡し、同じ数の返事を貰って帰る。貰った返事は村にある李姓の祠堂の入り口の左側に貼り、村民全体に公告する。もちろん、獺徳もほかの村々から招きをうける。四月の末までに、「遊龍」のすべての準備は必ず完成される。

訪れてくる客を接待する「請茶処」とほかの村に訪れていく時に鳴らす爆竹の用意もこの間の仕事である。「請茶処」で湯を沸かす臨時用の竈やテーブル、腰掛などとともに、大量の茶葉と菓子も準備しておかなければならない。菓子は珠江デルタの婚礼や祭りなどでよく見れる楕円形のパイで、中身によって皮の色もそれぞれ赤、白、黄になる。その形が数字の「0」に似ているために、それぞれ「紅零」、「白零」と「黄零」というようである。「請茶処」での仕事は、女性の役目である。

四月三十日、龍舟の「吃青」儀礼が行われる。「吃青」とは、水田からまだ青い稲の株を取って来て龍舟の両端に一株ずつ置き、龍舟に稲を「食べさせる」ことを意味している。村民の話によると、人間が飯を食べないと力を持つことができないように、「龍」もこの稲を食べてはじめて各地へ「遊龍探親」しに行く力が生まれるのだと思われる。耕地が買収されたために、獺徳では稲の株が取れなくなり、隣の村から購入しなければならなくなったという。

五月一日から、「遊龍探親」が正式に始まる。一日から四日までの間に、獺徳の八隻の龍舟は毎日朝八時前後に村を出発し、約束どおり招いてくれた村々へ「探親」しに行く。その行き先の中にはかなり遠く離れている村もあるために、広い珠江を何時間も航行をするのは避けられな

いことである。1949年以前には、その航行の危険性を考慮して、出発直前に必ず占いや安全祈願を行い、各「片」でそれぞれの「阿公」に庇護を求めることが行われた。1949年の後、特に文化大革命後、これらは行われなくなったが、出発の前に線香を供え、爆竹を鳴らすのはやはり欠かせないことである。

一日から四日の間に、「村民委員会」が子供の口にあう料理をつくり、毎日の夕食に子供を持つ家に配って子供に食べさせる。これを「龍船飯」という。子供は「龍船飯」を食べると元気に育つことができると信じられている。

五日は獵徳での「遊龍」の日である。近くにある石牌などの村々でも同じ日に「遊龍」を行う。獵徳とこれら村々の間でも、互いに龍舟を出して訪れることが行われる。来客を招待する仕事を務めるのは、主に年長の男性である。その一つが「請茶処」で来客を接待することであり、もう一つが埠頭でわら帽子を持って軽く振り、やってくる龍舟に温かい歓迎の意を表すことである。女性たちは菓子を出したり、茶を入れたり、茶碗を洗ったりすることで忙しい。

朝八時くらいから龍舟が続々とやってくる。十時前後には最高潮に達している。慣習に従い、あらゆる龍舟は村に入るとき、必ず龍頭を前進方向に向ける。そうでなければ非常に失礼だと思われるのである。村に入ってから埠頭に至るまでの間に、太鼓や鑼を叩き、爆竹を鳴らして招待者への敬意を表す。次に、埠頭に龍舟を泊めて全員が上陸する。「公座」を持つ人は「請茶処」の入り口で接待者に挨拶し、縁起のよい言葉を交わし、爆竹を鳴らしてから「請茶処」に入り、茶を飲んだり菓子を食べたりし、しばらく体を休ませた後に、もう一度爆竹を鳴らして龍舟に戻る。その後、爆竹を鳴らしながら村の入り口から埠頭までの間を数回往復してから去る。

やってきた客は、上陸して「請茶処」で茶や菓子を楽しむというのがほとんどである。ゆえに、数隻の龍舟が並んで同時に埠頭に泊まっていることがよくある。この場合、外側の龍舟に乗っ

ている人が上陸すれば、ほかの村の龍舟に足を踏むことは避けられないのである。これを「過艇」という。先に泊まった龍舟の中に、自分の村と仲の悪い村からのものがあり、「過艇」したくないということも時おりあるが、このような場合には、「公座」を持つ人が全員の代表として岸に上り、招待者へ挨拶をし、爆竹を鳴らして龍舟に戻り、数回の往復をしてから獵徳の河面から姿を消す。去っていく龍舟が守らなければならないのは、龍頭が常に招待者のほうに向いている状態を確保することである。

龍舟の船型は「競渡」に備え、短距離で最大のスピードを出せるように非常にきれいな流線型になっている。「遊龍探親」用の龍舟と「競渡」用の龍舟には異なるところが全くないが、「遊龍探親」のときに、互いに競争をしないことは、「遊龍探親」の参加者によって固く守られている。並んでいる龍舟の間で時おりスピード比べをすることもあるが、これは遊びの性質を持ち、勝利のためのものではない。逆に、よく人に挑む龍舟がいたら、非難されることが多い。その一方で、爆竹を鳴らすことは一種の競争といってよい。爆竹はかなり高価で使う量も多いために、どのくらいの爆竹を鳴らしたかということは、しばしば村の経済的実力の象徴として考えられる。一日に一隻の龍舟で数万人民元の爆竹を使う村もあるという。

「請茶処」での接待のほか、祠堂でも宴会を開き、「兄弟」を招待する。「兄弟」とは、広州の大塘村などの三つの村の李を苗字とする人々であり、獵徳からの分枝だと思われるものである。これらの村の龍舟は昼食の時間に到着し、「請茶処」へは行かず、直接祠堂の宴会場に入り、御馳走を貰ってから龍舟に戻り、接待者などと話を交わすことはない。家に帰って食事するように自由な雰囲気である。

午後5時前後、「遊龍探親」が終わる。

三. 地域社会での付き合いとしての「遊龍探親」
「遊龍探親」は「競渡」と並んで、端午節に行

われる龍舟行事の一種と思われる。端午節に龍舟を漕ぐという行事の起源とその機能については、説がかなり多い。その中でも、戦国時代の楚国の太夫である屈原の死を悼むことから龍舟行事が始まったという説が、一般の中国人の間に最も広がっている。ほかに、龍舟行事を「公共衛生事業」といい、季節の折り目である端午節に厄払いを行うことから龍舟行事が生まれたと強調する江紹原氏の説もかなり説得的なものである。龍は中華民族のトーテムで、特に河川の発達している中国南部で、龍崇拜が非常に盛んであったことは、民俗学者や人類学者からよく注目されている。1930年代に、神話学者の聞一多が、龍舟行事に含まれている龍のトーテム崇拜を深く分析し、龍舟の起源論において最も有力な説を立てた。

しかし、上述の獵徳村で行われている「遊龍探親」を分析すると、その農業社会での村同士の付き合いという性格がかなり顕著である。

「遊龍探親」の主な内容は、簡単に言えば村同士の間を、端午節を機会として互いに訪れたり、招待したりすることである。しかし、すべての村が招待されるわけではない。二つの条件が必要である。その一、友好関係を持っていること；その二、自らも茶や菓子や設け、ほかの村々を招待すること。その目的は友好関係を固めるまたは結ぶことであることがよく窺える。「遊龍探親」中は、平和的な雰囲気非常に重視されている。スピードの競争が禁止されていることも、茶と菓子や宴会が設けられることも、龍頭の向きが固く規定されていることも、そのためである。その中でも、獵徳村から分枝していった村から訪れる人を、普通の村々からの人よりいっそう厚く招待することは、中国の農村社会で、宗族が非常に重要視されていることを反映していると考えられる。宗族関係も、伝統の中国社会における社会関係ネットワークの非常に重要な一部であり、事情のある際に、最も頼もしいものといつてよいと思われる。

伝統の農業社会で、「遊龍探親」などによる村

同士の付き合いは、珠江デルタにおける地域社会の連携や安定に大変重要な役割を果たしていたと思われる。「水郷」といわれる珠江デルタは、自然に恵まれているところで、農業と漁業が盛んに行われてきたところである。特に広州周辺の地域は、中国の最も歴史の長い貿易港である広州の影響によって、人口も経済もかなり大きな規模に達し、村落の密度も注目される。このような状況で、用水や土地についての紛争を避けるのは非常に難しいことである。清代の朝廷に残された資料を調べると、広東では自然資源のために、村同士が暴力争いをすることがよく記載され、朝廷にとっても大変難しい問題であったようである。これに対し、広州周辺の地域は割と平和的であった。「遊龍探親」や「醒獅大会」などの村同士の付き合いは、その重要な理由であると思われる。

中華人民共和国の成立によって、社会主義社会に入った後でも、「遊龍探親」の地域連携機能は国家行政にあわせてしばらく活躍していた。獵徳の古老から聞いた次のような例がある。獵徳村のすぐ北に石碑という村があったが、両者は、歴史上、絶え間なく自然資源利用のために争っており、まったく往来がなかったという。1949年以後、二つの村は同じ人民公社に所属していたゆえに、両者の幹部がよく行政会議で顔を合わせ、上司の命令でもあろう、互いに仲良くしようと合意した。しかし、そのためには村民の賛成を得ることが必要である。考え出された方法は、「遊龍探親」を行うことである。それからの数年間、端午節になると、獵徳と石碑は互いに招待状を出し、訪れるようになった。村民の間にある程度の親密さができた後に、協議によって紛争を解決したという。ここには、「遊龍探親」が持つ村同士の付き合いとしての機能がよく窺えるほか、農業社会での伝統の根強さも反映されている。

現在、都市化が進んでいることにより、多くの村々の耕地が買収され、農業も漁業をもほとんど行われなくなり、農村社会に生まれた「遊

龍探親」の機能が弱まってきた。獵徳村では「遊龍探親」の伝統が続けられているが、その多くは古老たちの伝統を守る願望の所為である。生業の変化によって、珠江デルタのある村々の自然景観も大きく変わっている。村を流れる川が涸れたり、汚されたり、埋め立てられたりして船が通れなくなり、ほかの村を招待することができなくなるために、招待される資格すら失ってしまう村もだんだん増えてきた。客観的にみて「遊龍探親」の条件が不備になったのは事実であるが、「遊龍探親」によってほかの村と付き合いが必要や願望がなくなったのも理由であると思われる。

ここから見ると、都市化の進みとともに、伝統農村社会が解体していることが窺える。今後、地域社会での付き合いはどのように変わるのか、「遊龍探親」はこの地域から姿を消してしまうのか、興味深い問題であると考えられる。

参考文献

- 屈大均 広東新語, 中華書局, 1997
江紹原 江紹原民俗学論集, 上海文芸出版社, 1998
鐘敬文 鐘敬文民俗学論集, 上海文芸出版社, 1998
聞一多 神話与詩, 古籍出版社, 1956
費孝通 郷土中国, 観察社, 1948

註

- 1 本稿で用いられる日付は、説明のない場合、すべて旧暦である。

新刊紹介

丸 山 宏 著

『道教儀禮文書の歴史的研究』

当研究会の設立以来の同人である丸山氏が筑波大学に提出した学位論文が刊行された。氏は酒井忠夫、野口鉄郎の学統に連なる生粋の道教研究者である。手堅い文献研究で、多くの論文をものにされてきたが、近年は西南中国の納西族・彝族、東北中国の満州族・朝鮮族の民俗宗教にも関心を持ち、文献資料と民俗資料を総合した研究でも注目される気鋭の研究者である。本書は、近年にない箱入りの重厚な製本にたがわず、その内容は目の行き届いたと構成となっている。

序章で研究史と問題提起、史料の性格と方法についてふれ、第一部 六朝より唐宋に至る天師道の儀禮と儀禮文書—上章儀禮と章の研究—、第二部 現代台南道教の儀禮と儀禮文書—文檢を中心とする歴史的研究—、第三部 道士

による道教儀禮学と道教界批判の三部構成をとる。章節立てまで紹介するスペースは残念ながらない。ここでは、儀禮だけは旧字体で表したが、変換がすぐにできない漢字も多く使われ、字義に対する中国研究者の慎重さに学ばされる。

台南の廟で、道士やタンキーの行う儀禮をいくつか見たが、その淵源を探るためにはこのような文献の読破が必要なのか感心するばかりである。宗教儀禮における文字資料と非文字資料の統合的研究は口で言うほど易しくはないが、彝族の宗教者ビモに対する丸山氏の精緻な聞き取りなどを前にすると、文献の紙背に徹する読みが背景にあるのかと、今後、この方面での活躍を期待するしだいである。

(佐野賢治)

A5判 650頁索引付 2004年12月刊 汲古書院